金井篤子　1995　入浴行動にみる自立過程と親子の関係(7)　父親のワーク・ファミリー・コンフリクト　日本社会心理学会第36回大会
坂田桐子・黒川正流・鈴木淳子・金井篤子・石田英子　1995　ライフ・コースとキャリア形成過程の性差発生機序に関する時系列的研究(1)　日本社会心理学会第36回大会
吉田直子・梶田正巳・二宮克美・金井篤子　1995　入浴行動にみる自立過程と親子の関係(8)　父親の生活実態と子どもの父親への要望　日本教育心理学会第37回大会
梶田正巳・二宮克美・吉田直子・金井篤子　1995　入浴行動にみる自立過程と親子の関係(9)　子供の父親像と父親のしつけ観　日本教育心理学会第37回大会
金井篤子・梶田正巳・吉田直子・二宮克美　1995　入浴行動にみる自立過程と親子の関係(10)　自由画を通してみた子どもの入浴観　日本教育心理学会第37回大会
金井篤子・若林　満　1995　女性パートのワーク・ファミリー・コンフリクト　日本心理学会第59回大会

研　究　経　過　報　告

川　上　正　浩

1993年の11月から1995年の11月に至る2年間の研究経過について報告する。現在大きく3つのテーマに関心を持ち研究を行っている。

A．視覚提示された日本語の情報処理について

この研究は個人研究の領域であると同時に共同研究の領域でもある。日本語の情報処理過程，特に視覚的に提示された語の認知に関心を持っている。本学人間情報学研究科の齋藤洋典氏，増田尚史氏，Max Planck Institut の Flores d'Arcais 氏とは，熟語の処理，Migration と呼ばれる誤った漢字の再認をキーに主に漢字を対象とした研究を行っている。また本学教育学研究科の藤田知加子氏とは，視覚提示された日本語の処理の単位に関して共同研究を行い始めた。これらに関連して以下の論文執筆，学会発表を行った。

齋藤洋典・川上正浩・増田尚史　1994　漢字らしさに対する人の意味情報処理　―Migration Paradigm における仮名との比較―　信学技報，NLC94-9，15-22.
Flores d'Arcais, G.B., Saito, H., Kawakami, M., and Masuda, H. 1994 Figural and phonological effects in radical migration with Kanji characters. Advances in the study of Chinese language processing, 1, 241-254.
Flores d'Arcais, G. B., Saito, H., and Kawakami, M. 1995 Phonological and semantic activation in reading Kanji characters. Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 21, 34-42.
齋藤洋典・川上正浩・増田尚史　1995　漢字構成における部品（部首）の出現頻度表　情報文化研究，1，113-134.
齋藤洋典・川上正浩・増田尚史　1995　漢字構成における部品（部首）・音韻対応表　情報文化研究，2，89-115.
齋藤洋典・川上正浩・増田尚史　1994　Letter migration in Kana Recognition. 日本認知科学会第11回大会論文集，166-167.
齋藤洋典・川上正浩・増田尚史　1995　Phonological Effectin Radical Migration with Kanji Chracters. 日本認知学会第12回大会論文集，186-187.
藤田知加子・川上正浩　1995　漢字仮名混じり語の文字検出課題における表記の親近性　日本教育心理学会第37回総会発表論文集，166.
川上正浩・藤田知加子　1995　仮名語の語検出課題における表記の親近性　日本心理学会第59回大会発表論文集，676.

B．学習障害児の認知過程について

学習障害児の認知過程に関する研究は，聖徳学園岐阜教育大学の辻井正次氏らとの共同研究である。学習障害児の発達援助を考える上では，そのサブタイプ化が必要となる。本プロジェクトでは，そのサブタイプ化を認知過程の面から行うために，学習障害児に対して認知課題を課す実験を実施している。この研究は臨床心理学と認知心理学の領域を越えた研究であり，このテーマに関連して，以下の発表を行った。

小池理穂・川上正浩・行廣隆次・辻井正次・後藤秀爾・

蔭山英順・堀美和子・斎藤久子　1994　学習障害児の発達援助(4)　－LD児に対する情報処理的アプローチによる事例検討－　東海心理学会第43回大会発表論文集，27.

川上正浩・行廣隆次・辻井正次・藤田知加子・井本由美・後藤秀爾・蔭山英順　1995　学習障害児の発達援助(6)　－情報処理的アプローチによるLD児の視覚的文字列処理過程の検討－　東海心理学会第44回大会発表論文集，36.

C．期限付き課題の遂行について

我々が日常よく経験する遅刻現象について，社会心理学的な枠組みと認知心理学的な枠組みの両方から明らかにすることを目的に，期限が決まっている課題（期限付き課題）の遂行について検討している。現在は質問紙調査の形で東京老人総合研究所の川野健治氏と共同で研究を進めている。このテーマに関連して，以下の発表を行った。そろそろ一段落を付けたいと考えているテーマである。

川上正浩・川野健治　1994　期限付き課題の遂行について(3)　日本教育心理学会第36回総会発表論文集，209.

川野健治・川上正浩　1995　期限つき課題の遂行について(4)　日本教育心理学会第37回総会発表論文集，614.

D．その他

また，以下の本の章を執筆する機会を得ることができた。こうした機会を与えて下さった久世敏雄先生，梶田正巳先生に感謝したい。

川上正浩　1994　青年期の記憶　久世敏雄（編）　現代青年の心理と病理　2章2節　福村出版　Pp.45-54.

川上正浩　1995　知的成長をうながす教育的かかわり　梶田正巳（編）成長への人間的かかわり－心理・教育的理解　第9章　Pp.134-148.

研究経過報告 ——'94年秋～'95年夏——

小　嶋　秀　夫

【歴史的・文化的発達研究，比較研究】

日本発達心理学会第5回大会でのミニシンポジウム「文化・比較研究をめぐって　——比較文化研究の前提と方法——」に発表者として参加した（1995年3月，同志社大学）。

トロントのThe Ontario Institute for Studies inEducation（OISE）で5月24～27日に開催されたワークショップ，"Knowledge in education: The challenge of gender, ethnicity, and language" に招かれて講演をするとともに，ワークショップにも参加した。これまでほとんど接触したことのなかった人々，カナダのいわゆる先住民（最近，first nations people という呼び方が定着しつつある）出身の研究者及び中国の少数民族出身の研究者との接触，あるいは，そのような変化の背景にある政治的条件の知識を含めて，たいへん意味のある経験をもった。このような企てに，日本の大学研究者として，どのような寄与が可能かを，一緒に参加者していた教育学科の牧野助教授と話し合った。

文化と心理学に関する新しい英文雑誌に，コメンタリー論文が出た。Form and function as categories of comparison. *Culture and Psychology,* 1995, 1, 139-145.

【発達の概念，発達論，文化と発達】

レヴュー論文，「発達研究の現在」が現れた：児童心理学の進歩，1995，**34**，1-24.

「生涯発達心理学の成立と現状」という論文が現れた：無藤　隆・やまだようこ（編）『講座　生涯発達心理学1』　金子書房，1995. Pp. 11-35.

【家族関係；社会的相互作用・対人関係と発達】

「家族・子ども・社会の文化」と題する章が，次の本の中に載った：梶田正巳（編）『成長への人間的かかわり』有斐閣，1995，80-95. また，発達における重要な他者としてのメンター（mentor）の研究結果が松田惺氏が中心になってまとめられた：松田　惺・若井邦夫・小嶋秀夫　発達における重要な他者（メンター）との関わりの分析（2）日米高校生の比較研究　愛知教育大学研究報告（教育科学），1995，**44**，101-120.

【テキスト・辞典等】

放送大学の講義（テレビ）のための印刷教材の3つの章を執筆した：「異文化と自文化への関心」（Pp. 131-141.）；「文化比較から学ぶこと」（Pp. 142-151.）；「人間の育ちと社会・文化」（Pp. 152-160.）三宅和夫（編）『子どもの発達と社会・文化』放送大学教育振興会，1995年3月。また次の辞典の項目を執筆した：『発達心理学辞典』（育児書ほか12項目）ミネルヴァ書房，1995

年。

【その他】

市販誌に次の論文が現れた。「子どもの発達と文化的・社会的情況」　小児看護，1995，18，473-478.へるす出版。

（1995年10月11日）

研　究　経　過　報　告

速　水　敏　彦

1．「外発的動機づけと内発的動機づけの間」に関する研究

このテーマは従来の外発的動機づけ対内発的動機づけのフレームを変えていこうとするものであるが，平成7年度科学研究費一般研究（C）「動機づけの内面化過程の促進に関する研究」としても認められ，中学生，高校生，大学生を対象とした検討を進めている。この基本的な考え方は今年の沖縄での日本心理学会のシンポジウム「学校教育と内発的動機づけ」（司会北尾倫彦教授）でシンポジストの一人として「外から内への動機づけ」と題して講演した。さらに，Japanese Psychological Research に Beyond extrinsic versus intrinsic motivation と題する論文が来年度，掲載される予定である。また，原稿を依頼され，心理学評論には「外発と内発の間としての達成動機づけ」という論文を書いたが，これも来年度印刷される予定である。他に，授業研究（明治図書）のリレー連載，「認知心理学から授業研究への提言」で「親密な人間関係で自律的動機づけを」という一文も書いた。

2．自己成長力に関する研究

日生財団の助成による研究が終わり今年，シンポジウムが行われ，シンポジストの一人として参加した。その研究内容は昨年と今年のこの紀要に掲載されている。さらに研究を総括した書物が出版され，その一部を担当した。

「自己成長力を育む」　祖父江孝男・梶田正巳編著『日本の自己教育力』金子書房

3．教師の感動体験に関する研究

マツダ財団の助成によるもので現在，感動体験の作文を多数，収集しているが，この研究の前段階の雑談に関する研究の一部は今年の日本心理学会で共同発表した。この時の資料は教育心理学フォーラムとして出版したいと考えている。また，「教師・子ども・学校」　梶田正巳編『成長への人間的かかわり』有斐閣の中でも触れた。

4．その他

動機づけの発達に関する共著で『動機づけの発達心理学』有斐閣をようやく出版した。これは今まで注目されていなかった動機づけの縦の流れをとらえようとするもので，筆者は幼児の動機づけの発達と大人および老人の動機づけの2章を担当した。また，水越敏行監修　北尾倫彦編集　教育方法改善シリーズV「学習評価の改善」国立教育会館印刷の中の「関心・意欲・態度の評価」「形成的評価と個人内評価」など全体の約4分の1を担当した。さらに栗林君との児童のリーダーへの動機づけの研究は継続中で教育心理学会で発表のみを行った。

研究経過報告（'94年4月～'95年10月）

吉　田　俊　和

赴任して早くも1年半が経過したが，あわただしい毎日の連続であり，研究経過という形で自己点検するのは，少々気恥ずかしい思いがする。

1．「社会的促進に関する研究」

新たな実験を行ったわけではないが，投稿中の論文が2編公刊された。

対人距離が課題遂行に及ぼす効果－社会的促進における注意のコンフリクト仮説の検討－　1995　社会心理学研究，10，87-94.

注意のコンフリクトが課題遂行に及ぼす効果－認知的不